フォルボネにおける奢侈と消費

米　田　昇　平

序

奢侈的欲求の経済的機能に着目することで道徳的批判の対象からそれを救い出そうとしたマンデヴィルの問題提起は，フランスにおいてムロンやヴォルテールを通じて奢侈論争を惹起し，18 世紀の思想的展開に大きな影響を及ぼすことになった。それは「富と徳」の問題あるいは「商業社会」をどのように評価するかという問題を象徴的に問うものであったからである。マンデヴィルはしかし一方で労働者の怠惰による自発的失業を恐れて低賃金の必要を力説し，したがってそこでは結局，文明社会を構成する人々は「国家の豊穣や奢侈」を享受する一部の富者（消費者）とそれを生み出す大多数の労働貧民（生産者）とに分裂せざるをえなかった。また国民的富裕の増進を掲げ，マンデヴィルの低賃金論を退けたムロンにおいても，その観点は十分に経済学のレベルへと昇華されるにはいたらず，消費欲求の主体は明示的には同じく富者にかぎられていた(1)。

フランスにおいて経済学の見地からかれらの議論をすすめたのがフォルボネ（François Veron de Forbonnais, 1722-1800）であった。フォルボネはヒュームの影響をも受けながら，奢侈的欲求を単に消費水準の向上を求めることと同義にすぎないとし，だれもに開かれた消費欲求を一つの原動力として農業とインダストリーとの均衡的発展による国民的富裕の増進を求めた。それがグルネ・サークルの有力な一員として現実的な生産力の

拡大策を探り，後には重農主義に対する最大の論敵の一人となるフォルボネの終始変わらぬ基本的スタンスであった。

本稿はケネーの『経済表』(1758年）の前後に出版された『商業要論』(*Elémens du Commerce*, 2vols, 1754）と『経済の原理と考察』(*Principes et Observations Œconomiques*, 2vols, 1767）の代表的な二つの著作によりながら，経済ビジョン全体とのかかわりにおいてフォルボネの奢侈・消費論の概要を示そうとするものである(2)。

(注) (1) 本稿は筆者の「奢侈と消費——マンデヴィルとムロンを中心に——」『下関市立大学論集』第38巻，第3号（1995年1月）に続くものである。マンデヴィルなど18世紀初めの奢侈・消費論に関してはこの前稿を参照されたい。

(2) フォルボネの生涯とささやかなフォルボネ研究の現況に関しては，津田内匠「フォルボネの保護主義(1) ——その形成と初期の未発表手稿『農業と商業と財政にかんする試論』の検討——」『経済研究』第35巻，第4号（1984年10月）を参照されたい（その後では Simone Meyssonnier, *La Balance et l' Horloge, La gene se de la pensée libérale en France au XVIII' siècle*, 1989が詳細にフォルボネを扱っている)。この津田論文は『百科全書』に寄稿された諸論稿までを対象としており，これらに諸章を加えて成った『商業要論』の成り立ちにも詳しい。なお［1］『商業要論』は1755年版を，［2］『経済の原理と考察』（本文中では『原理と考察』と略記）は2巻が合冊されたKraus社の復刻版（1980年）を用いている。またボワギルベールとカンティロンについては紙幅の節約のためいちいちその典拠を示さなかった。次の拙稿を参照されたい。「ボワギルベールの消費論」『下関市立大学論集』第35巻，第2・3合併号（1992年1月），「カンティロンの社会構成論——地主と企業者——」『下関市立大学論集』第37巻，第2号（1993年9月)。

1．大衆的消費と貨幣

農業とインダストリー（産業労働）との分業を基礎としてあらゆる職業が相互依存の関係にあるとするのが，フォルボネの一貫した基本的前提で

ある。彼はいう，「農業とインダストリーが商業の本質であり，それらの一体性は一方が他方を凌駕すればみずから自滅してしまうほどである。インダストリーがなければ土地の果実は価値をもたないであろうし，農業がなおざりにされれば商業の源泉は枯渇してしまう」([1], I, p. 28)，あるいは「人々のあらゆる職業はお互いに相互依存の関係にあり，同じ原理の作用によって動くことは注目すべきことである」([1], I, p. 157)。この相互依存を基底から支えているのは農業生産であり，ほかの生産部門の展開は基本的に農業生産力に規定されている。このような農業を基本とするあらゆる職業の相互依存は，流通過程を担う商業の機能のもとにその全体が統括される(1)。フォルボネは商業の包括的概念により経済の全体を交換＝流通過程から捉えようとするが，この商業的経済観は一方で生産過程における価値の実現が流通過程の在り方に強く規定されていることを強調しようとする意図をもつものであった。たとえば農業は商業の対象とみなされることではじめて「その本質的効果」を発揮しうる (*ibid.*)。すなわち耕作の放棄をもたらしうるような低価格を免れ「生活資料を中庸な価格で維持する」([1], I, p. 173) ためには，国内での物資の自由流通のほかに流通が国外に開かれていることが不可欠であった。あとでみるように生産はもっぱら消費水準に規定され，しかも内外の市場は密接にリンクしているから生産と消費を繋ぐ商業あるいは流通の在り方はいわば死活的重要性をもっているのである。こうして商業の目的は広く相互依存の順調な機能により国民的富裕を増大することにある。彼は「国家における商業の目的は，労働を通じてできるだけ多くの人々を安楽に保つことである」([1], I, p. 28) と明言している。

『原理と考察』では，この相互依存は農業から生まれる「始源的富」に基づく「相互的欲求」あるいは「相互的効用」の体系としてより明快に規定されている。生産の目的は消費であり「物産への欲求が労働と生産の直接の原因である」。しかしそのためには生産者は自己の消費分を上回る余剰と交換に，ほかで生産された自己の欲求を満たすだけの効用を有する等

価物を受け取らねばならない。逆にいえば彼の余剰を求める消費者は彼に与えるべき余剰をもつ「有効な消費者」でなければならない。したがって生産者は同時に「有効な消費者」でもなければならず，この意味で欲求の相互性が生産の相互性を導く。この点で彼は「生産を生ぜしめるためには一国に消費者や大勢の人口をかかえるだけでは十分ではない，人口は能動的（active）でなければならない」とする。すなわち生産者が同時に「有効な消費者」であるためには，能動的人口，言い換えれば就労人口こそが求められるのである。こうして余剰と余剰の交換は欲求と欲求のあるいは効用と効用の交換にほかならず，お互いに欲求の充足のために「他人の欲求や嗜好を思案」（[2], I, p. 17）しながら余剰の生産に励むのである。このような相互性こそが社会的結合の原因であり，「自然の秩序は絶えず人々のあいだに所有の不平等をもたらし，欲求と用役との絶えざる関係を通じて人々を社会に結合させようとする」。この欲求の体系においてはまさに「すべての人々は欲求の相互性および交換の相互的効用によって富むのである」。したがって二重の意味で「消費は生産の水準」であり，消費欲求は主体的に生産と労働を導くとともに，客体的に消費需要に転化して生産と労働の水準を規定するのである（[2], I, pp. 2-9）。

人々の消費欲求は多様であり，自己保存の観点からすれば必要性に差がある。「欲求（必要）の序列が生産の序列を規定し」，人々は優先的に一次的必要品の生産に向かう。その余剰が二次的必要品の生産をもたらし，その余剰が三次的必要品の生産をもたらし，その余剰が増大するにつれて奢侈品の生産が行われるようになる。これらを生産するあらゆる職業は「そのすべてを支える共通のリングに結び付けられた環」としてお互いに支えあい依存しあっている。この循環的，因果的依存関係の起点は一次的必要品の余剰つまり農産物余剰であるから，この余剰が無価値となれば相互の「結合関係の数は減少し」，経済は収縮する（[2], I, pp. 18-21）。したがって土地所有者の余剰こそが「人々を活動させ豊かにする」基本的原因であり，「土地所有者の好みや気紛れが三次，四次，五次の必要の序列に

かかわる仕事を生み出すから，それらの生産に従事する人々の雇用に頻繁に変化が生じるのは事物の自然に属することである」([2], I, p. 22)。このようにカンティロンの言い方を用いつつも，農産物余剰の増大を前提に地主の奢侈的欲求に牽引されてより高次の欲求の体系が構築されていくというここに示された構図は，ボワギルベールのものとまったく同じである。なぜなら土地の完全利用を前提にするカンティロンの静態的な農産物の生産と分配のシステムでは安定した地代収入は予め約束されていたが，ここではボワギルベールと同じく農産物余剰の安定的供給を保証するものは便宜品や奢侈品の生産者たちの農産物需要であり，これによる農産物の「中庸な価格」の実現であったからである(2)。

このような相互依存あるいは「相互的欲求」の体系の水準と在り方が消費水準とその在り方に規定されることは，すでに明らかである。二重の意味で消費が生産を規定するのであった。彼によればこの相互依存のシステムを支えているのは就労者の大衆的消費である。大衆が消費する財は「価値はわずかでも消費の繰り返しが価値の総額を莫大なものにする。……より多くの職人たちが就業しより多くの量の土地の生産物が利用されるであろう」([1], I, p. 149)，あるいは「社会の有利は明らかにより大勢の人々に販売することである。これにより，より多くの素材が用いられより多くの人々が産業労働，運送，海運を通じて就業する」([1], I, p. 156)。産業労働に従事する就労者大衆の農産物の消費という「確実な消費がなければ農業生産を行うことはできない」([2], I, p. 21) し，また製造品の「国内の消費は一国の人口の基本をなす階層の人々の増加，つまり耕作者の増加によってもっともよく保証される」([1], I, p. 179) のである。植民地の建設の目的もおもに本国の土地生産物やとくに産業労働の製品の販路を求めることにあり ([1], I, p. 222)，黒人奴隷を植民地に導入するのも生産の拡大とともに本国の物産への消費の増加を期待してのことである ([1], I, p. 229)。

フォルボネは国民の安楽を求めしかも大衆的消費の意義を強調しながら

も，あとでみる対外的関係への考慮から，けっして高賃金による購買力の増加を求めない。消費の増加をもっぱら消費者の数の増加に期待する。この意味でまさに「人口はこの国内流通（国内消費）の魂」（[1]，I，p. 33）であった。こうして彼は生産と消費の相互的拡大を可能にする就労人口すなわち生産者が同時に「有効な消費者」であるところの能動的人口の増加を最大の目標として掲げ，さまざまな就労者の増加策を提言する(3)。このような大衆の購買力や就労人口への着目は『経済表』直前期の生産力主義の理論的支柱であり，多くのエコノミストの共有するところであった。グルネは端的に「一人の競争者は一つの販路である」と看破し，プリュマル・ド・ダンジュールは大衆の購買力に着目しつつ，人口構成の歪みを是正し「有用な」人口を増加することでフランスの劣勢を挽回しなければならないと強調した(4)。『商業要論』のフォルボネもこの観点から同じく製品の安価を求め(5)，そのために「競争，人間の労働の節約，輸送費用の低減，低金利」（[1]，I，p. 38）を求める。これらの論点は特権批判，徒弟制度の改善の要求などと結合して労働の自由と労働所有の保全の主張へと収斂し，「自由と競争」の原理を導いていくのである。

フォルボネは以上のようにボワギルベールの一般的相互依存の体系にさらにグルネらと共有する対外的観点を組み込み，独自の展開を導こうとする。彼によれば国内での相互依存は対外的関係と密接にリンクしており，それはこの在り方に大きく規定されているのである。たとえば，国産品と競合する外国産の製品の輸入は国産品の消費を害し，その生産に従事する労働者から賃金の価値を奪うばかりか国産品の原料がもちえた価値を奪い，したがって「これらすべての価値の流通による利益すなわち消費を通じてさまざまなその他の臣民に及んだはずの安楽さと……君主が臣民の安楽さから期待すべき財源を」奪ってしまうのである（[1]，I，p. 30）。逆に製品輸出の見返りに土地所有者の嗜好に応える物産が輸入されれば，この等価物の提供は所有者の生産意欲を刺激するし，見返りに製品の生産者たちの生活資料が輸入されてもそれにより「自然的な割合を上回る」過剰

な人口を維持することができる。いずれにせよ輸出製品の生産は農業における過剰人口を「労働力の仕事」に吸収しうる機会を与えるのである([2], 1, p. 67)。しかしながら，対外的関係は一方の利得は他方の損失という過酷な状況に置かれており，そこでは「隣り合うあらゆる社会は絶えずまたお互いに疑心暗鬼の状態にあって……嫉妬」をかきたてあっている([2], I, pp. 53-4)，しかも産業労働の進歩は各社会で不均等である([1], I, p. 147)。したがってフォルボネには，「交易上の嫉妬」はナンセンスであると論難するヒュームの国際分業論は受け入れ難い観念論であり，とりわけ「進歩の不均等性」を無視する点で非現実的であったであろう(6)。こうして国内での「自由と競争」の原理は対外的観点からの保護政策と連動したものでなければならなかった。彼はこの観点と消費水準を重視する観点とを結合して一種の消費バランス論を展開する。「二国間での産業労働における進歩の優位は，その国の国内消費と国外の消費の優位に依存する」(*ibid.*)。外国産商品の消費はできるだけ少なくし，国産商品への国外の消費をできるだけ多く獲得せよ，と力説するのである。こうして立法者は相手国の消費者の嗜好や気紛れに配慮する「商人にすぎなく」なる([1], I, p. 152)。

さらに外国貿易は購買力の直接の増減を導く貨幣の流出入の原因としても重要な役割を担っている。ここで彼の貨幣論を簡単にみておきたい。

彼は貨幣が媒介的手段としての機能のみを果たし，物産が絶えず貨幣と交換されてとどまるところがない状態を「貨幣の自然的流通（une circulation naturelle)」と呼ぶ。このときには生産物の価値総額と貨幣総量のあいだに一定の比例関係が成立するにすぎず，したがって機械的数量説が当てはまり貨幣量の多少は問題にならない。ところが貨幣は他方で購買力と一体化した価値保存機能を発揮して「自然的流通」から離脱し，経済に重大な影響を及ぼしうる。このときの状態を彼は「構成された（人為的）流通（une circulation composée)」と呼ぶ。それは一つには貨幣の蓄蔵によって生じる，基本的には蓄蔵された貨幣は貸付資本として流通に復帰

するが（貯蓄＝投資），一般的不信用[7]により予備的需要が増大するときには貨幣は一方的に流通から引き上げられてしまう，このような退蔵は明らかに「自然的流通」を阻害しその分だけ消費力の減退を招くのである（[1], II, pp. 53-60）[8]。より深刻なのが貨幣が国外に流出する場合である。退蔵された貨幣は信用の回復とともに流通あるいは商業に復帰しうるが国外へ流出すれば「買い手の数は永遠に減って」しまう，この国内消費の減少が失業者を生み出しかれらを国外へ追いやり，これによる人口の減少はさらに消費と生産を減少させてしまうのである。したがって「シーニュの量それ自体は貨幣と物産の相互の量に応じてそれらの所有者のあいだに交換の相互の確実さを確立するのに無関係であるとしても，逆に，それをもとにしてこの割合と交換の確実さが確立されたところのシーニュの総量がけっして減少しないことがきわめて重要である」（[1], II, p. 61）[9]。

これに対し貨幣量の新たな増加はアクティブな影響を及ぼす。鉱山の所有からもたらされる貨幣は少数の人々の「支出能力」を高めるにすぎず，もっとも有用ではない物産の価格を高めるだけであり，「有用かつ必要な物産の労働により就業している人々の階層」には無縁であるが，貿易バランスの順調による新たな貨幣の流入は「あらゆる種類の物産，あらゆる階層の人々を巻き込む」からきわめて有効である。すなわちある物産への消費増は価格の上昇によりその物産の生産を刺激しこれを増加させる，これとともに「幸福な連鎖」によって全般的な消費水準が波及的に増加しインダストリー全般を刺激するのである。これにより不信用の原因が消滅すれば「古い貨幣の所有者たちはもっと自由にそれをばらまき，流通はその自然的秩序に近づく」であろう[10]。このように流通貨幣量の増加は最終的な物価上昇を招く前の段階で「かならずや……インダストリーを刺激する」のである（[1], II, pp. 62-4）。カンティロンとヒュームにおける数量説と連続的影響説の併存をここにみることができる。ただしフォルボネにとって貨幣の増加による最終的な高物価の結末は貨幣量の自動調節によるその平準化などではけっしてなく，ひとたび貨幣量が減少に転ずれば先にみた

過程を通じてただちに「政治体は激しい危機に見舞われるだろう」([1], II, p. 70) としており，この点ではカンティロンに近い[11]。さらに『原理と考察』では，貨幣量の増加を契機とする生産の増加と競争の激化が物価騰貴をかなり緩和しうること，潜在的生産力が大きいほどその効果は大きいこと，どの国もいまだ最高の生産水準には達しておらずしかも生産力の水準は各国で不均等であるから，それに応じて各国での貨幣の存在量は不均等であること，そしてなにより世界的な貨幣の存在量は一定ではなく年々新たに供給されており，各国は相互不信から競争心を発揮してこの新たな貨幣の獲得を競いあい「行き過ぎた嫉妬」にまでいたるのが常であることを力説して，自動調節機能論の非現実性を衝いている ([2], I, pp. 115-7)。したがって生産物の価値総額と貨幣総量の比例関係は絶えず動揺し，その度に重大な影響が生じるのである。ヨーロッパの均衡はむしろこのような振動を通じて，生産力と就労人口の規模の違いに応じて，したがってまたそれに応じて貨幣量が配分されるという不均等な形で実現されるのであり([2], I, p. 118)，生産力の全面開花の果てに過度の高物価ゆえに最終的に外国貿易が停止しうるのは，「何世紀にもわたって貨幣を引き寄せる権利を争った」([1], II, p. 74) あとのことにすぎなかった。

このように国内の相互依存は対外的な生産力競争に密接にリンクしていた[12]。したがってイギリスのような高穀価と高賃金をたどるべき道筋として措定しながらも，彼は「産業労働の進歩」のうえで立ち遅れたフランスでは当面の間，低穀価と低賃金により貿易バランスの有利を獲得することが優先しなければならないと考える。「わが国の労働力は金利が高いうちは，強制してはならないが，ある程度まで安価に保たれることが重要である。これによりわが国の外国貿易はいっそう拡大するであろう。それがもたらす富は肉，葡萄酒，バターの，そして二次的，三次的，四次的必要にかかわるあらゆる土地の生産物の消費者の数を増加する」([1], I, p. 102)。こうして国民の「安楽」を最大の目標として掲げ，しかも就労者大衆の消費購買力に着目しながらも，高賃金を経済の動因として積極的に推賞する

ことは彼にはありえない選択肢であった。高賃金はあくまで発展局面に付随して生じるその結果にすぎない。彼はむしろうえの観点から税負担の公平を求め，所得分配のいっそうの平等化を求める。彼はいう，「富の保管所は人民の手にあってこそ有効であり，……これらの富はできるだけ平等に分配されねばならず，それをもたらしうる一般的手段はどんなに小さなものであれ無視されてはならないように思える」([1], II, p. 49)。

(注) (1)「農業，製造業，自由技芸，漁業，海運，植民地交易，保険，為替が商業の八つの分肢を構成する」([1], I, p. 4)。

(2) フォルボネへのボワギルベールの影響は明らかであり，『原理と考察』のところどころで彼を取り上げている。たとえばボワギルベールの『フランス詳論』(1695年) は「さまざまな点で高く評価されてしかるべき著作であり，不当さの程度においても，ときとしてそれを手引きとして利用した人々（重農学派）の場合よりもよほどましである」([2], I, p. 285) としている。

(3) 彼は帰化を容易にし信仰の自由を認めるなどにより外国人労働者の流入を促すこと，社会に負担を与える無為の人々を就業させること（ワークハウスはそのためのすぐれた制度である），祝祭日の労働を許すことなどを提言し，あわせて実業を蔑視するあらゆる傾向を批判する。さらに「人間を獲得することは大きな有利である，しかしかれらをできるだけ最良の仕事に就かせることがなにより必要である」から，この点で農業労働者が農村を離れて都市の富者の家僕になるのは最悪であるとしている([1], II, pp. 153-7)。

(4) 詳しくは米田「18世紀中葉におけるフランス経済学の一動向 —— グルネとフォルボネを中心として ——」『経済学研究年報』(早稲田大学経済学研究科) 第22号 (1983年) をみよ。

(5)「職人の妻はシリア産の毛織物を1オーヌ10リーブルなら買わないが，価格が7リーブルなら買う決心をする。彼女には品質はほとんど問題ではない。もっと身分の高いもっと金持ちの女性と同じくらい美しく着られれば彼女はそれで満足する」([1], I, pp. 156-7)。『原理と考察』ではこの「安価と豊富」の論理によって重農主義の「高価と豊富」の論理を批判している。すなわち高価による高利潤は新規参入を招き競争を激化させるが，これにより「時間や腕や原料の節約」をもたらす工夫が行われ生産費を低下させ価格を低下させるから，「こうして高価なものはたちまち普通の価格となり，普通の価格のものは

常に安価」となり，安価と豊富が行き渡るとする（[2], I , pp. 32-3)。これは明らかにスミスのビジョンの先取りである。

(6)『原理と考察』では鉾先は重農主義のコスモポリタニスムの非現実性に向けられている。

(7) 彼は一般的不信用の原因として，通貨価値の不安定（増価・減価）による不信用，株式の下落による独占会社の不信用，公債の償還の不確実さによる不信用をあげている。

(8)『原理と考察』では物々交換の「単純流通」に対して貨幣に媒介される流通全般を「構成された流通」と呼び，後者での貨幣の機能をシーニュと不動産の二つの機能に分けている。

(9)『原理と考察』では賃金の下方硬直性の観点から貨幣量の減少のマイナス効果が示されている。すなわち貨幣量の減少により賃金基金が減少するが，賃金の引き下げは事実上不可能であるから必然的にそれは雇用の減少を招き，したがって消費の減少を導く，これにより生産は縮小し高価と賃金の引き上げをもたらすが，その結果もっとも必要な労働者しか雇用されなくなり，失業者は増大して経済の縮小に拍車がかかる，という次第である（[2], I , pp. 129-130)。

(10) ボワギルベールは貨幣をいくら獲得しても状況次第では退蔵されるだけであるとして貿易バランス論を批判したが，フォルボネは貨幣の流入は経済を活発化し不信用など退蔵の原因を除くとしている点で，このような批判をある程度逃れている。ただ貨幣の増加を購買力の増加と同列に論じているかぎり，消費需要水準の観点を明確にみることはできない。

(11) 彼はまた，貨幣の流入は過度の高物価を招かないように漸次的でなければならず，過剰な貨幣は宝石や貴金属類に換えるべきことなど，カンティロンと同じ議論を展開している。

(12) このため自由は「社会の一般的な利益が許す」範囲に制限されねばならず（[1], I , p. 48)，場合に応じて政府の介入が求められる。ただしグルネのような強力な指導的介入ではなく，産業の自立を側面から援助するため輸出助成金を与えるなどの緩やかな介入にとどめるべきことを度々強調している。なぜなら「今日ではあらゆる国民が貿易の利益に関して十分に開明的であり，一国だけがあえて厳格な措置をとることはできない」（[1], I , p. 195）からである。

2．奢侈論と重農主義批判

みてきたように，国内での相互依存あるいは「相互的欲求」の体系は国際経済と密接にリンクしつつ，消費水準とりわけ就労者大衆の消費力に導かれて自己実現を遂げうる体系であり，したがって国民の安楽はその結果でありかつ原因でもあった。このような観点から，マンデヴィル，ムロン以来の奢侈的欲求の問題に彼はどのように答えるであろうか。

フォルボネは，奢侈を「余分な支出」とみて非難することは実質的平等を求めて人々を物理的必要のレベルに押し込めてしまうことであるが，人間の情念に物理的必要に限定された質素な暮らしを甘受させることは不可能であると断じる。そしてそもそも「余分な支出」の多くは自己保存をより確実にするための「余分な便宜」を求めるものにすぎず，しかも「自然の虚栄心や享楽への傾きにより，余分な便宜に無関心でいることは一般にありえない」とする。ここに彼は物理的な必要と奢侈とのあいだに「便宜」の一領域を設け，奢侈か必要かといった不毛な二者択一の議論を退けうる視点を示す(1)。すなわちいわゆる奢侈を自己保存にかかわる便宜とそれを越える部分に分け，前者を奢侈批判の対象から救い出そうとするのである。しかしながら便宜の領域は広大であり，「一般にみられる趣味の多様性」から判断されるように，「余分な便宜とはその利用に関しては相対的な必要以外のなにものでもない」し，さらには便宜と奢侈との境界も曖昧である。こうして結局のところ，「(通常いわれる) 奢侈の観念は比較の問題にすぎない」ことになり，奢侈はほとんどその実体を失う（[1], II, pp. 134-7)。それは境遇の改善のために「余分な便宜」あるいは「快適な便宜」を求めること，すなわち単に消費水準の向上を求めることと同義にすぎなくなる。こうして彼はいう，「考えうるかぎりの明確さをもって，奢侈を……快適に生活する能力を人間が行使することであると定義すべきであるように思われる」([1], II, pp. 136-7)。そしてこのように定義された奢侈は，人間の徳性の腐敗を招くどころか人間の眠っていた才能を目覚

めさせ，むしろ洗練を導く原動力である。彼は「奢侈は人間を教化しその礼儀を洗練し気質を和らげ想像力を磨き知識を完全なものにする」と述べつつ，ヒュームの言説をそっくり引用している（[1], II, pp. 141-2)。このように道徳的な奢侈批判は不可能を望むに等しくまた的外れでもあったが，そればかりか奢侈の社会的効用に目をつむり，奢侈が社会的結合および社会の繁栄の原因であることを無視するものであった。彼は「奢侈を非難する人々の主義主張はいつも人間の情念，競争心，社会の魂や絆と相容れないであろう」（[1], II, p. 137）と切り捨てている。

すでに明らかなように，奢侈的欲求は生産と労働の誘因であるとともに客体的には生産と労働の水準の規定要因でもあった。「現状で満足できる人はほとんどいないから，このような満たされぬ思いや野心がインダストリーの努力を倍加し，貧民のための職業の種類，社会の幸福と力を絶えず増加させる」。この欲求は「余分な便宜」の生産を刺激しその生産者により大きな購買力を与えるから，生産者はこれまでもたなかった「有用な便宜」をもつことができるようになり，こうして「金持ちがみずからの楽しみの数を増せば増すほど，この同じ貧民は以前の生活状態とくらべれば奢侈的となる。これによりかれらは以前より幸福となる」。したがって「社会において奢侈が制限されているかもしくは奢侈が減少の傾向にあれば，社会は土地の労働や，許された便宜または現在用いられている便宜の労働に必要な数の労働者しかもたないであろう」。また奢侈の進歩に応じて市民のあいだで目覚める競争心の動機は，「世評の平等」すなわちほかの人々と同じように豊かで幸福だとみなされたいという願望にあるから，したがって立法者は「いつも捕えようとすると手をすりぬけいたずらに願望をかき立てるにすぎないこの見せかけの誘惑物を，一般にすべての市民に勧めることほど賢明な施策はほかにありえない。国家の力と繁栄はこのような幻想をかきたてる人がどれだけいるかにかかっている」ほどである（[1], II, pp. 136-8)。このような『商業要論』での奢侈の認識が，社会を「相互的欲求」の体系とみる『原理と考察』での社会認識に連なって

いくことはいうまでもない。奢侈的欲求が単により高水準の消費欲求の充足を求めるものにすぎないとすれば，まさにこの欲求の相互性とそれに導かれる生産の相互性が社会的結合の原因であり相互依存を牽引していく原動力であったのである。

ところで彼は「世評の平等」は実質的不平等が不可避であるため不可能な願望にすぎないとするが，この不平等は技術力や能力に応じて報酬の格差を承認する「密かな公正さあるいは慣例的な公正さ」を損なわない合理的なものであるかぎり妥当であると考える。「問題は自己の報酬として受け取るべきその釣り合いなのである」([1], II, p. 139)。しかもこの不平等はけっして固定されているわけではなく，機会の平等を通じて常に流動的である。したがって不平等が各職業の「釣り合い」を損なわない妥当なものであるかぎり，「分配が繰り返されるにつれて農業者や職人はより多くの快適な便宜を知るようになり，その便宜の利用によりそのほかの無数の人々も同じ能力を高めていく。各階級において人々のあいだになお残る不平等がかれらを意気阻喪させることはない。なぜなら，その原動力は明らかでありだれにも手の届くところにあるからである。すなわちそれはインダストリーである」([1], II, pp. 138-9)。妥当な不平等の存在ゆえに「世評の平等」がだれもに与えられることは「永遠に」ありえないが，しかしだれでもインダストリー次第でこの不平等を流動化し，みずから望む奢侈的欲求を充足することができる。国民的富裕はこのようなダイナミックな過程をともないつつ全体として増進されていくのである。こうして奢侈的欲求の充足はだれもに開かれその二重の機能はだれもに期待される。彼はいう，内外の商業を通じて「国民の奢侈は常により一般的なものとなる。商業は個々人を権力の手本によりそのように強いるというよりは，むしろかれらの能力の増加によりかれらを支出へと招く」([1], II, pp. 139-140)。カンティロンは静態的な地主社会モデルにおいて，豊かな市民は消費を君主や地主の手本に倣って行うから社会の消費構造は最終的に君主や地主の消費動向により規定されるとしたが，フォルボネは内

外の商業のダイナミックな過程を通じて国民の購買力が増加しこれとともに奢侈が一般化すると考える。ここにはマンデヴィルにみられた労働貧民（生産者）と富者（消費者）の分裂はありえないし，また明示的に生産者と消費者を一体のものとして捉えきれなかったムロンの不徹底さもない。フォルボネはかなわぬ幻想に駆り立てられて進展する「相互的欲求」の体系としての商業社会の本質を見事にえぐり出したのである。

一方，富者の奢侈は国民の奢侈によってのみ保証されるし，またそれは国民の奢侈を導くかぎりでのみ有意義であるから，相互依存に無縁なあるいはそれを損なう富者の奢侈は「過度の奢侈」として排斥されねばならない。「その動因が商業とは無関係の奢侈」がそれである。これにより「流通の自然的秩序が覆えされ，諸階層間の均衡が破壊されもっとも幸いの少ない人々は見捨てられてしまう」，奢侈の「有益な結果は一部の人々だけに感じられるにすぎなくなり……大きな害悪がそれとともに生じるであろう……（こうなれば）大勢の人々は奢侈に対し辛辣な不満をぶつけるであろう」（[1], II, p. 142）。「商業とは無関係の奢侈」は人々をそれほど職に就けることがないし，しかも家僕などの「無用な職業」を過度に増やすにすぎない。さらに野心と虚栄心から過度の贅沢が普及すれば，子供の扶養がおろそかになり人口減少の原因ともなる（[1], II, pp. 143-4）。こうして彼は過度の奢侈をも容認するマンデヴィルの奢侈擁護論を「奇妙な逆説」であると批判する。フォルボネは一方で過度であれ富者が支出をやめてしまうことを恐れているが(2)，富者の奢侈に関する彼の主眼が商業の原因となりかつその結果であるような奢侈に置かれていることは明らかである。したがってとりわけ「外国貿易が豊富の原因であるならばその豊富は一般的となるであろう」（[1], II, p. 142）し，この意味で「貿易商人の財産はそれによって生存が保証される何千もの家族にいかなる嫉妬も起こさせない」（[1], II, p. 139）。言い換えれば，富者の奢侈は基本的に職業間の「釣り合い」を保った妥当な不平等に基づくものでなければならないのである(3)。しかも彼はいう，「きわめて豊かな貿易商人が少数いるより

も，豊かな貿易商人が大勢いる方が有効であろう。それぞれが10万エキュをもった20人の商人は10人の百万長者よりもより多くの仕事を行い，……さらに分割された財産は流通や実質的富にとって無限に大きな源泉である」([1], I, pp. 50-1)。さらに土地所有に関しても「土地の生産の増加は大所有の場合には無駄であろう，唯一の希望は小規模な所有者の必要（欲求）と自然的傾向に基づきうる」([2], I, pp. 42-3）とする。なぜなら大土地所有では，所有者は農村を離れ都市に集まって享楽的生活にふけり余剰を奢侈に用いるから（これ自体は破壊的なわけではないにしても），生産の拡大は期待できないからである。所有者もまた経営者（生産者）であることを求められ，そのために小土地所有が推奨されている。消費欲求の二重の機能は不平等が緩和されるほど十分に果たされうるからにほかならない。この点で，フォルボネは不労所得を支出する消費者にすぎない富者の存在意義を消極的にしか認めなかったといえよう(4)。

以上みてきたような国民の安楽の増大を目標に掲げ，奢侈的欲求の二重の機能に着目するフォルボネの視点は重農主義の体系に対する内在的な批判を可能にした。最後に全編が重農主義批判で貫かれた『原理と考察』での奢侈・消費論に関する彼の批判の眼目をみておきたい(5)。批判の要点は次の二つである。1. 消費水準が生産水準を規定するのであり，インダストリーに従事する人々の農産物需要こそが農業生産の原因であること，2. しかも真の豊かさは生活の安楽すなわち量的，質的に豊かな消費物資を享受することにあるからこの点でもインダストリーの重要性は明らかであること，この二つである。

彼はまず，折半支出による単純再生産に対して地主が製造品への支出を相対的に増やせばそれだけ農業生産は減少し再生産は縮小するが，農産物への支出を相対的に増やせば，増やした以上に農業生産は拡大するから再生産は拡大するとする見方に対し，どちらの場合でも最終的に借地農のもとに回帰する貨幣には違いがないからそのようなことはありえないと考える。製造品への支出分はその生産者によりかならずや農産物の購入に振り

向けられるから，どちらかにより多く支出することは直接に借地農の手元に戻る分と間接的に戻る分の割合を変化させるにすぎないのである。したがって「所有者の最大の支出が土地の物産に向けられれば，耕作者たちの手にはかれらの前払いや回収を上回る額が入ると考えるのはまったくの幻想である」([2], I, p. 231)，「表の著者たちは借地農の利潤の増加および耕作の原前払いと年前払いの増加と，所有者の土地の物産へのより直接的な支出とを混同した」([2], I, p. 234) のである。農産物への直接の支出が相対的に増えれば，貨幣はより迅速により確実に農業者の手元に戻るという利点が考えられるが，しかしそもそも一人の地主に関して農産物の支出が増えるということは，彼の物理的な食事の量が増えるか雇用人や馬などを増やした結果でしかない。前者の理由はナンセンスであり後者は望ましくない ([2], I, p. 232)。農業生産における前払いの増加は農産物需要の増大による価格の上昇によって農業利潤が十分に保証されてはじめて可能であり[6]，このためには製造業などに従事する人々の大衆的消費こそが求められる。したがって地主の製造品への支出が人々に雇用を与え購買力を与えるならば，むしろ農業生産に有利である。販路がなければどのような生産も維持されえないのである。たとえば洗練されたアートが無用となりそのために農産物需要が減少すれば，アートに向けられていた労働力や資本が農業に向かうことはありえないであろう ([2], I, p. 253)。彼にはそもそも一定の一般的消費水準のもとでこれを各部門にどのように配分するかという問題設定そのものが無意味であり，どの部門であれ均衡的にしか発展はありえず，このために貨幣の漸次的流入と国内外の市場の拡大により一般的消費水準を高めることがなにより求められたのである。

またフォルボネは，重農主義のビジョンは人間の本性に反しており実現不可能であるとみる。「あなたがたはいたるところで哲学的な農業の計画を作る，そこではもっぱら生産に従事する人間はほかのいかなる情念にも動かされることはないし，単純な必要品しか知らず，また毎日，……その余剰のすべてを新たな生産に向ける。ところでそのような見方には欠陥が

ある，なぜならそれは不可能だから」([2], II, p. 115)。人々の生産意欲を駆り立てるのは「享楽の希望」であり，これがかなえられないところでは「あらゆる厚生の原動力である」([2], I, p. 252) 競争心も奪われて相互依存は収縮してしまう。この次第はすでに十分にみた通りである。このような「享楽」あるいはより高水準の消費欲求の向かう先は「単純な必要品」を越えて「便宜品，快適品，装飾品，豪華品へと拡大していく」([2], I, p. 12) が，これらがインダストリーの産物であることはいうまでもない。富を生まない不妊階級とされる人々の労働の成果こそが「国民の安楽」を実質的に高めていくのである。これらの点で，ケネーの農業的秩序の論理はむしろ人間の自然に反し不可能を求めるものであった。この意味で彼はイギリスの在り方を高く評価する。「この国は原生産物の商業を 6, 7 倍少なく行い，労働力の商業を土地の生産物の商業よりも 10 倍多く行っているが，われわれはそこにそれに対応してはるかに大勢の人民が活動的に動き回る姿をみるであろう，かれらによってあらゆる階層の人々が安楽に生活している」([2], II, p. 118)。こうして「農業国」フランスの観念は彼にはナンセンスな偏見にすぎなかったのである。

(注) (1)「自己保存をより確実にするさまざまな便宜は，物理的な必要と奢侈とのあいだに自然がもうけた一段階だと私には思える」([1], II, p. 135)

(2) したがって批判の矛先は過度の奢侈そのものではなく，それを生じさせた原因つまり「政治体を動かす悪しき原理」に向けられる。

(3) 土地の所有と労働の所有を基礎にそれぞれの所有者の技術や能力に応じた妥当な不平等こそ，彼にとって維持すべき社会的ヒエラルキーであったように思える。彼は「ヒエラルキーを社会を救済することを免除する諸特権と混同してはならない」とし，国民を「一つは零落に身を任せる階層，もう一つは事物の自然により君主制の構成原理を必ずや損なうほどに上昇するかもしくは次には下降する」二つの階層に分化してはならないとしている ([2], I, p. 44)。

(4)『原理と考察』ではこの富者は土地所有者と「所有（資産）の強制的な移動」によって富を得た富者とに峻別される。消費者にすぎない土地所有者よりも同時に経営者（生産者）でもある（小）所有者の方が望ましいにせよ，いず

れにせよかれらの消費は正当な所有に基づくものであるのに対し，後者の高利をむさぼる金融業者や重税により集めた収入を独占する一部の人々の奢侈はまったく不当であり，道徳家たちの奢侈批判もここに向けられるべきであると力説している（[2], I, p. 250)。メソニエールは，自由主義を基本としながらも均衡的成長による国民の安楽の増進を目標に掲げて不平等を退け全体の利益を優先させるこのようなフォルボネの構想は，資本主義のシステムを求めるものではなく，いわば「平等主義的な自由主義（libéralisme égalitaire)」に基づくものであるとして，そこに彼のオリジナリティをみている（Meyssonnier, *op. cit.*, p. 225)。

(5) 小池基之「二人のフランソワ——François Veron de Forbonnais と François Qesnay——」『敦賀論集』（敦賀女子短期大学）第2号は，両者の貨幣観と富観におもに焦点を当ててかれらの体系の相違を浮き彫りにしている。また菱山泉『重農学派と「経済表」の研究』（有信堂，昭和37年）の第3章第4節「フォルボネとケネー」は，おもに『百科全書』への寄稿論文を中心にフォルボネの理論・政策体系をまとめ，これをケネーのそれと比較している。なお『原理と考察』における重農主義批判は，直接には第1巻第2部でのミラボーの『人間の友』第6部の「説明付き経済表」への批判と第2巻第3部でのケネーの「穀物論」と「借地農論」への批判を通じて行われている。

(6) ケネーには，ここにみている一定の消費水準のもとで地主の消費動向により再生産の規模が規定されるとする『経済表』の消費主導論（したがって恒常価格としての良価が前提されている）と，その理想的世界にいたるために内外商業の自由化を通じて穀物需要を増大し穀物価格を（良価の水準まで）引き上げることを主張する消費主導論の二つの消費論がある。フォルボネは前者の誤りを指摘しつつ後者の消費論の有効性は基本的に承認する（[2], I, p. 235)。

3. 結　び

フォルボネには奢侈的欲求は単に消費水準の向上を求めることと同義にすぎなかった。道徳的な抑制の対象であった奢侈はここではむしろ国民的レベルでその水準を高めていくことが望まれる。すなわち奢侈は「人々の安楽」であり国民的富裕にほかならなかったからである。そしてこのような国民的富裕の増進それ自体が奢侈的欲求の二重の経済的機能により導か

れる。洗練を求めるこの消費欲求は，主体的には勤労の誘因として客体的には生産と労働の規定要因として機能することで，みずからを充足していくのである。生産システムの高度化は富者の奢侈的消費によって導かれていくのであれ，この相互依存のシステムを支えているのは就労者大衆の消費力とインダストリーであり，この意味でかれらの果たす二重の機能こそが期待されねばならない。こうしてフォルボネにおいて，奢侈論は一面で大衆的消費の理論と結合し，消費欲求の充足あるいは国民的富裕のための生産力の理論の重要な一要素となる。フォルボネはこうした消費論に貨幣論，貿易論，人口論などを結合しつつ，生産力競争に立ち遅れたフランスの生産力の拡大策を求め，ヒュームとは異なる展望を描いた。生産力理論の在り方を規定する現実的条件や理論レベルはどうあれ，こうして奢侈論の展開に導かれつつ，富の理論としての経済学の中核に消費欲求の観点が据えられることになった。

このような観点が彼の重農主義批判の論拠の一つともなっていたが，しかし彼はケネーが切り開いた資本理論（純生産論）を十分に受けとめることはなかった。ボードーはケネーの消費論に内在する矛盾を受けとめ，再生産の規模を規定するのは地主の消費動向ではなく前払いの生産性と農業者の手元に残る農業利潤からの投資水準（生産的労働者数の増加）であるとして，ケネーの学説を修正し資本理論を発展させたが(1)，一方フォルボネは再生産における資本の役割は十分に承知しながら，資本は消費増による価格の上昇によって増加しうることをわずかに示唆したにすぎず，経済学における資本理論の可能性には思いいたらなかったのである。周知のように『原理と考察』のわずか9年後にスミスは資本利潤の蓄積・投資による生産力の自己増殖という販路説的展望を示したし，これを消費の観点から批判する過少消費説にしても，資本の過剰蓄積による過剰生産を恐れるものであった。これに対し『原理と考察』の段階でもフォルボネには生産力の水準を規定するのはどこまでも消費水準であり，したがって生産力の拡大のためには，基本的に過小生産（潜在的生産力あるいは失業の存在）

を前提に貨幣の漸次的流入と国内外の販路の拡大により一般的消費水準を高めることで生産力を顕在化させるか，もしくは素朴に徒食者の就業や他国からの就労者の流入などにより生産力と消費力をともに体現する就労人口を増加させるほかなかった。彼の大衆消費主導論は同時代の多くの消費主導論と同様の理論的限界をもつものであったが，しかし過小生産を前提にした相対的短期での理論的有効性はいうまでもないし，なにより経済の動因としての消費への着目それ自体は資本理論との結合の在り方はどうあれ，固有の意義を有しているといえよう。

シュンペーターのいうこの「なんの独創力もない折衷主義者」(2) は，しかしながら奢侈論と消費論を結合することで，洗練を求める奢侈的な消費欲求こそが経済の動因であり，農業を基礎にしながらもインダストリーの発展にこそ経済社会の向かうべき方向があることを，フランスにおいてだれよりも明快に論じた。このような「産業社会（cette societé industrieuse)」([1], I, p. 147）の構想は，そのための現実的条件への視点とともに影響力をもち続け，重農主義の「地主社会」論が地主中心主義へと硬直化していくにつれ，これへの批判の論拠となり，さらには革命後の産業主義の一源流ともなっていくのである(3)。

(注) (1) A. Dubois (éd.), *Nicolas Baudeau, Prncipes de la science morale et politique sur le luxe et les loix somptuaires, 1767*, (Paris, 1912) またその邦訳を含む，渡辺輝雄「『奢侈』ならびに『豪奢』にかんするボードーの二つの論文」『東京経大学会誌』第73号（1971年）をみよ。渡辺論文はケネー→ミラボー→ボードーへと重農学派の奢侈論の変遷を辿っている。フォルボネの奢侈論との比較は興味深いテーマであるが，ここではその余裕をもたない。

(2) Schumpeter, J. A., *History of Economic Analysis*, New York, 1954, p. 174（東畑精一訳『経済分析の歴史』1955年，第1巻，362ページ)。

(3) 津田内匠氏は「自由貿易と保護主義の相克——18世紀フランスのイーデン条約をめぐって」杉山忠平編『自由貿易と保護主義』（法政大学出版局，1985年）で，デュポン・ド・ヌムールが推進したイーデン条約への批判がフォルボネの議論に論拠を求めている事実を指摘している。